御陵遺跡 2

－2 次 調 査－

福岡県春日市須玖北所在遺跡の調査
春日市文化財調査報告書　第56集

2010

春 日 市 教 育 委 員 会

御陵遺跡 2

－2 次 調 査－

福岡県春日市須玖北所在遺跡の調査
春日市文化財調査報告書　第56集

(1) 御陵遺跡２次調査区全景（西から）

(2) 御陵遺跡２次調査出土青銅器鋳型

序

春日市は、アジアの玄関口として栄える福岡平野の南部に位置する都市で、今では人口10万人を越える都市に発展してきました。反面、市内には多くの遺跡や昔からの風習や祭りが継承されており、文化豊かなところでもあります。

特に、春日市のほぼ中央に延びる春日丘陵とその周辺には、南北２㎞、東西１㎞にわたり弥生時代の遺跡が濃密に分布し、須玖遺跡群を形成しています。当遺跡群からは、30面前後の前漢鏡などが出土した王墓や、他に類を見ない多くの青銅器鋳造関連遺物が発見され、奴国の王都とされています。

今回報告いたします御陵遺跡は須玖遺跡群には含まれませんが、春日丘陵の西側に広がる台地上に所在する遺跡です。当遺跡や近接する野藤遺跡などは、これまで発掘調査がさほど行われておらず、埋蔵文化財について不明な部分が多い地区でした。

しかし、近年の発掘調査の増加により、少しずつ遺跡の性格が明らかになり始めました。いずれの調査も小規模なものですが、弥生時代の青銅器鋳造に関連する遺物が出土することから、この地でもある程度の青銅器生産が行われたことがわかってきました。

ここに報告いたします御陵遺跡２次調査でも、複数の青銅器鋳造関連遺物が出土し、新聞などでも取り上げていただきました。特に銅剣鋳型は、特殊な銅剣を製作した興味深いものです。

貴重な遺跡の発掘調査報告としましては、本書の不十分さは免れませんが、研究資料として末永く活用され、また、一般の方々にも広く利用していただければ幸いです。

なお、最後になりましたが、発掘調査に際しまして、ご協力、ご指導を賜りました方々に心から感謝の意を表します。

平成22年３月31日

春日市教育委員会
教育長　山　本　直　俊

例　言

1．本書は、2008年７月14日から７月30日にかけて春日市教育委員会が実施した、個人専用住宅建築に伴う御陵遺跡２次調査の緊急発掘調査の報告書である。

2．遺構の実測は、井上義也・吉田浩之（現大野城市教育委員会）が行い、製図は牧平佳恵が行った。

3．遺物の図作成は、平田定幸・井上・末田敬子・吉富千春、製図は井上・末田・吉富が行った。

4．掲載写真のうち遺構については井上が撮影し、遺物については岡紀久夫（文化財写真工房）が行った。

5．本書に使用した２万５千分の１地形図は、国土地理院発行の『福岡南部』である。

6．本書の遺構実測図に用いた方位は、座標北である。

7．本遺跡出土の石製鋳型については岩永省三氏（九州大学）、小田富士雄氏（福岡大学）、武末純一氏（福岡大学）、柳田康雄氏（國學院大學）、吉田広氏（愛媛大学）のご教示を得た。また、柳田氏には発掘現場においてもご指導いただいた。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに …… 1
1．調査に至る経過 …… 1
2．調査の組織 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 2

Ⅲ　調査の内容 …… 5
1．調査の概要 …… 5
2．遺　構 …… 6
(1)　竪穴住居跡 …… 6
(2)　溝状遺構 …… 9
(3)　ピット …… 9
3．遺　物 …… 9
(1)　土　器 …… 9
(2)　青銅器鋳造関連遺物 …… 12
(3)　鉄　器 …… 14
(4)　石　器 …… 15
(5)　ガラス小玉 …… 15

Ⅳ　まとめ
1．弥生時代の集落について …… 16
2．青銅器鋳型について …… 17
(1)　銅矛鋳型 …… 17
(2)　銅剣鋳型と復元される銅剣 …… 17

図 版 目 次

巻頭カラー図版(1) 御陵遺跡２次調査区全景（西から）
(2) 御陵遺跡２次調査出土青銅器鋳型
図 版 1 御陵遺跡周辺航空写真
図 版 2 (1) 御陵遺跡２次調査区全景（西から）
(2) 調査区拡張部
図 版 3 (1) １号竪穴住居跡拡張前（東から）
(2) １号竪穴住居跡Ａ－Ａ′土層
(3) １号竪穴住居跡炉跡半截状態
図 版 4 (1) １号竪穴住居跡鋳型出土状態
(2) １号竪穴住居跡鉇出土状態
図 版 5 (1) ２号竪穴住居跡全景（東から）
(2) 銅矛中型出土状態
(3) ３号竪穴住居跡全景（北東から）
(4) 溝状遺構土層（南東から）
図 版 6 (1) １号住居跡出土土器
(2) ２号住居跡出土土器①
図 版 7 ２号住居跡出土土器②
図 版 8 (1) ２号住居跡出土土器③
(2) ３号住居跡出土土器
(3) 溝状遺構出土土器
図 版 9 青銅器鋳型
図 版 10 (1) 銅矛中型・鞴送風管・銅滓
(2) 鉄鉇・砥石
(3) ガラス小玉

挿　図　目　次

第１図　御陵遺跡周辺遺跡分布図……3
第２図　御陵遺跡位置図……4
第３図　御陵遺跡２次調査遺構配置図……6
第４図　１号竪穴住居跡実測図……7
第５図　２号竪穴住居跡実測図……8
第６図　３号竪穴住居跡実測図……9
第７図　溝状遺構土層図……9
第８図　１号竪穴住居跡出土土器実測図……9
第９図　２号竪穴住居跡出土土器実測図①……10
第10図　２号竪穴住居跡出土土器実測図②……11
第11図　３号竪穴住居跡出土土器実測図……12
第12図　溝状遺構出土土器実測図……12
第13図　青銅器鋳造関連遺物①……13
第14図　青銅器鋳造関連遺物②……14
第15図　鉄器・石器実測図……14
第16図　ガラス小玉実測図……15
第17図　銅剣復元図……18

表　目　次

表１　ガラス小玉観察表……15

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経過

平成20年６月、須玖北９丁目75番に個人専用住宅建設計画の打診を受けた。当地は御陵遺跡に含まれ、１次調査地点や御陵古墳が近接する。遺構の有無を確認するため６月16日に確認調査を実施したところ、地表面から30㎝程で住居跡やピットが確認された。

地権者と春日市教育委員会で埋蔵文化財保護に関する協議を行い、遺構に影響を与える住宅建築部分を中心に対象地の東側64.6㎡を市の単独事業として緊急発掘調査することになった。

発掘調査は、平成20年７月14日から７月30日まで行った。

２．調査の組織

発掘作業および整理作業における調査体制は下記のとおりである。

発掘調査（平成20年度）

教育長		山本　直俊
社会教育部長		籏原　三郎
文化財課長		古賀　俊光
管理担当	課長補佐	白水　心子
	主　査	塩足　雅弘
	主　事	山田ひとみ
文化財担当	係　長	平田　定幸
	主　査	吉田　佳広
	主　査	森井千賀子
	主　任	井上　義也
	嘱　託	吉田　浩之
	嘱　託	長谷部真弓

報告書作成（平成21年度）

教育長		山本　直俊
社会教育部長		古賀　俊光
文化財課長		西尾　純司
管理担当	課長補佐	白水　心子
	主　査	塩足　雅弘（～６月）
	主　査	福間　義彦（７月～）
	主　事	山田ひとみ
文化財担当	課長補佐	平田　定幸
	主　査	吉田　佳広
	主　査	森井千賀子
	主　任	井上　義也
	嘱　託	牧野　幸子
	嘱　託	齊藤　礼
	嘱　託	松田　千恵

Ⅱ　位置と環境

御陵遺跡は、福岡県春日市須玖北８・９丁目にかけて確認されている遺跡で、今回の２次調査地は須玖北９丁目75番である。

博多湾に面した福岡平野は、中央に那珂川、東部に御笠川が北流する沖積平野であり、春日市はこの平野の南部に位置する面積14.15㎢の都市である。春日市のほぼ中央には、南方の脊振山系から派生した春日丘陵が南北に伸び、春日丘陵北部や周辺地域を中心に旧石器時代から歴史時代までの遺跡が確認されている。御陵遺跡は、この春日丘陵西側の台地の北端に広がる遺跡である。

旧石器時代の遺物は市内で十数ヶ所確認できる。各遺跡から出土する遺物は、御陵遺跡をはじめほとんどが再堆積したもので、門田遺跡のように文化層として確認できた例は極まれである。

続く、縄文時代は、原遺跡、柏田遺跡などで住居跡や石組遺構、立石遺跡などでも陥穴状遺構が確認されている。

弥生時代前期以前は、伯玄社遺跡、平若Ａ遺跡などで墳墓や集落が認められるが、爆発的に遺跡の数が増加するのは、中期の前半以降である。

中期前半以降、特に春日丘陵と北部の低地には南北約２㎞、東西約１㎞に渡り遺跡が続き、須玖遺跡群を形成している。その規模は全国的に見ても最大級で、中期末の須玖岡本王墓や夥しい数の青銅器鋳造関連遺物が出土している。

中国の史書に記された奴国については、福岡平野を比定することがほぼ定説となっているが、他に類を見ない王墓や青銅器鋳造関連遺物の質や量から、須玖遺跡群は奴国の王都と考えられる。

この時期の御陵遺跡は、調査例が少ないため詳細は不明である。しかし、隣接する野藤遺跡と共に鋳型などの青銅器鋳造関連遺物が高い割合で出土し、今後注目すべき遺跡と言える。

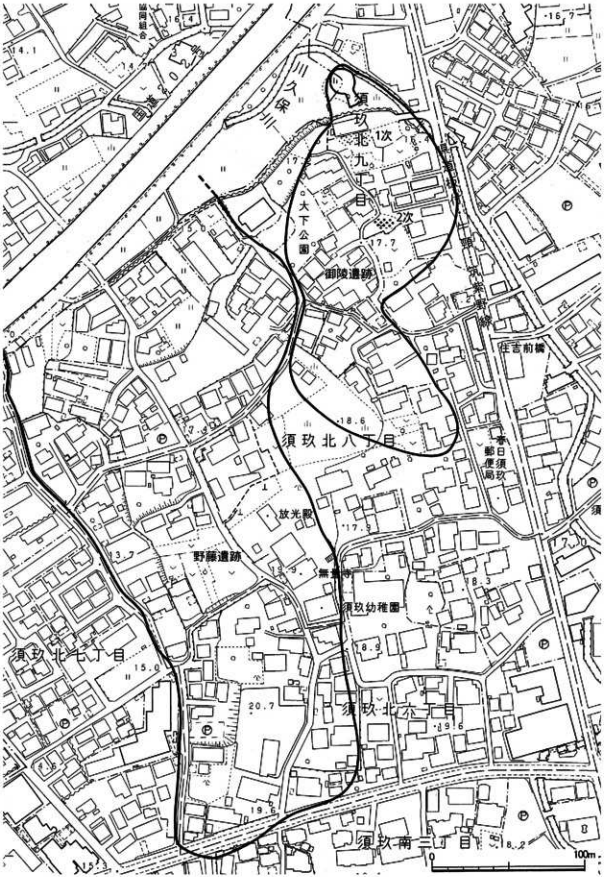
古墳時代の遺跡は弥生時代に比べ少ない。ただし、日拝塚古墳などの前方後円墳が市内西側の台地上に造営されている。御陵遺跡でも遺跡北端には初期の前方後円墳と推測される御陵古墳があり、隣接する１次調査では前期の方形周溝墓の可能性がある溝が検出されている。

古代には、大宰府の西門から鴻臚館へと通じる官道が春日公園内遺跡や先の原Ａ遺跡などで確認されている。天神山と大土居では小水城が確認でき、小倉、春日などにも小水城が築かれた可能性がある。また、西日本最大級の須恵器窯跡である牛頸窯跡群の西方に当たる浦ノ原窯跡群や惣利窯跡などが認められる。なお、古代寺院に瓦を供給したと考えられるウトグチ瓦窯跡も牛頸窯跡群の一角と捉えてもよいかもしれない。

中世には、中白水遺跡で上白水館跡が調査されており、北部の須玖岡本遺跡や野藤遺跡でもまとまった遺跡が明らかになる可能性がある。なお、文献には下白水北に天浦城があったと記されており、市内には他の城跡があった可能性もあり、今後発掘調査による関連遺構の検出が待たれる。

1 御陵遺跡
2 野藤遺跡
3 笠抜遺跡
4 手島遺跡群
5 井尻B遺跡群
6 須玖唐梨遺跡
7 須玖永田A遺跡
8 須玖黒田遺跡
9 須玖五反田遺跡
10 須玖坂本B遺跡
11 須玖岡本遺跡坂本地区
12 須玖尾花町遺跡
13 岡本ノ辻遺跡
14 須玖盤石遺跡
15 須玖岡本遺跡王墓地点
16 須玖タカウタ遺跡
17 浦田遺跡
18 林添遺跡
19 平若A遺跡
20 平若C遺跡
21 赤井手遺跡・赤井手古墳
22 竹ヶ本遺跡・竹ヶ本古墳
23 弥永原遺跡群
24 下ノ原遺跡・下白水大塚古墳
25 西方遺跡
26 豆塚山遺跡
27 宮の下遺跡
28 トバセ遺跡
29 大南A遺跡
30 大南B遺跡
31 仁王手A遺跡
32 伯玄社遺跡
33 松添遺跡
34 西平塚遺跡
35 立石遺跡
36 原町遺跡
37 駿河A遺跡
38 大谷遺跡
39 一の谷C遺跡
40 石尺遺跡
41 寺田・長崎遺跡
42 日拝塚遺跡・日拝塚古墳
43 門田遺跡
44 原遺跡
45 ウトグチB遺跡・ウトグチ瓦窯跡
46 天神山水城跡
47 大土居水城跡
48 紅葉ヶ丘遺跡

第1図　御陵遺跡周辺遺跡分布図（1/25,000）



第２図　御陵遺跡位置図（１/２,５００）

Ⅲ　調査の内容

１．調査の概要

春日市の中央には春日丘陵が南北に伸び、その丘陵北部や、さらに北の低地には須玖遺跡群が所在する。御陵遺跡は、この丘陵の西側に広がる台地の北端に所在する遺跡で、弥生時代から古墳時代前期を主体とする。今回報告する２次調査地は、１次調査地から南西に約20ｍの場所にあり、１次調査で多く弥生時代の青銅器鋳造関連遺物が出土したため、１次調査同様、古墳時代前期の集落や墳墓、あるいは、青銅器鋳造に関連する遺構が確認されると予測していた。

確認調査によって、対象地の西側に遺構が密集することが明らかになったため、対象地205㎡の内、建築物などにより遺構が影響を受ける中央から東側を発掘調査の対象とした。

当地は、表土を約30㎝除去すると赤褐色の粘質土が現れ、これを切り込んだ状況で黒褐色土の覆土からなる遺構が確認された。また、当地は過去に住宅地や畑にされていたようで縁辺部は擁壁や井戸などにより攪乱されていた。ただし、周囲の状況や近隣の古老の話から考えて、さほど削平は受けてないように思われた。

発掘調査の結果、竪穴住居跡３軒、溝状遺構１条、及びピットを検出した。遺構の分布は、試掘調査の結果とも合わせて考えると対象地の西半部は希薄で、東半部は密度が高い。

３軒の竪穴住居跡は、調査区の東側で確認した。調査区が狭小であることや攪乱のために完掘出来たものはない。１号住居跡は、調査区東隅で検出した。残存度の良い青銅器鋳型が出土したため、地権者と相談のうえ可能な限りの拡張を行った。ただし、土置き場などの都合上、拡張部の表土剥ぎは調査の終了した東側を埋めながらの作業となった。このため拡張部を含めた調査区全景写真はない。

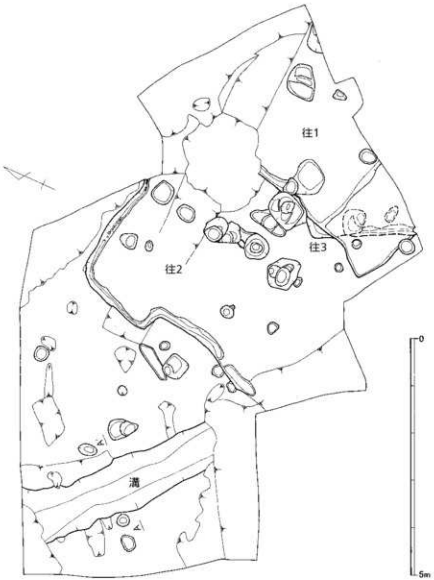
遺物は、青銅器鋳型の他に弥生土器、鉄製鉋、銅滓、ガラス小玉、砥石が出土した。青銅器鋳造関連遺物や多くのガラス小玉の出土は、特殊な建物であった可能性を示唆する。

２号住居跡は、調査区中央から東側で検出し、３軒の中では最も調査面積が大きく、遺物の量も多い。平面形は北東部に張り出しを持ち、柱穴も特殊な配置である。弥生土器、銅矛中型が出土した。なお、１号・２号住居跡の切り合いについては確認できなかった。

３号住居は、１号住居に切られるため残りが悪い。遺物は弥生中期の土器片が少量出土した。

溝状遺構は、幅約１ｍ、調査区西側で検出した。弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、鞴送風管が出土した。出土遺物から中世の溝状遺構と考えられ、弥生土器、土師器、須恵器は混入品、鞴送風管も胎土や焼成などから考えて弥生時代のものと推測される。

ピットは、調査区のほぼ全域で確認することが出来るが、掘立柱建物の柱穴になるようなものはなく、特筆される遺物も出土していない。



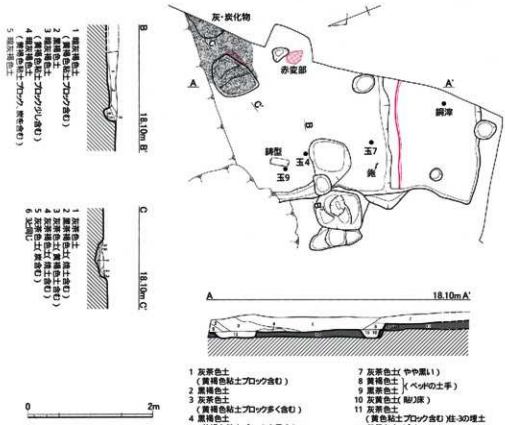
第３図　御陵遺跡２次調査遺構配置図（１/80）

２．遺　構

⑴　竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（図版３・４、第４図）

調査区西隅に位置する竪穴住居跡で、西側は調査区外までのび、北側は攪乱により破壊されて全体の規模は不明。壁高は最も残りの良い東側で約25㎝である。住居の南側には幅1.5ｍ前後、床面からの高さ約10㎝のベッド状遺構が付設されている。１号住居跡は、３号住居跡が廃絶・埋没後に建てられており、ベッド状遺構は、３号竪穴住居跡の覆土及び地山の削り出しによって作り出されている。なお、３号住居跡の覆土が軟弱であったのであろうか、ベッド状遺構の縁部は、赤褐色の地山ブロッ



第４図　１号竪穴住居跡実測図（１/60）

クで堤状に形成されている。

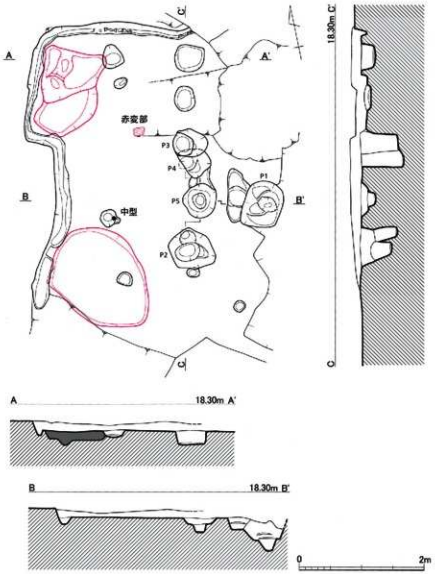
床面には、西側壁下の一部に幅約15～25㎝、深さ約５㎝の小溝が巡る。深さ10～20㎝程度のピットの他に北東隅で深さ38㎝以上の大形のピットを一部検出した。完掘できなかったため断定できないが、主柱穴の可能性がある。炉跡と考えられる土壌を床面の西隅で確認した。周囲には炭化物が集中し、一部に焼けた痕跡がある。また、炉跡の南方にも焼けた痕跡が見られた。床面に幅10㎝のサブトレンチを設定し、貼床の確認を行ったところ厚みは10㎝前後であった。

当住居跡に伴う遺物は、弥生土器、青銅器鋳型、銅滓、鉄製鉈、砥石、ガラス小玉がある。銅滓はベッド状遺構直上で出土した。

２号竪穴住居跡（図版５-⑴・⑵、第５図）

調査区の中央から東側で検出した住居跡で、北西部に張出を持つ。住居跡の壁面は北・西部で確認したが、南・東部は削平を受けており未検出である。ただし、自然地形は東側に向け下がっており、斜面の高所である西側を掘り込み平坦面を確保したのみで、もともと東側の立ち上がりはなかったかもしれない。

壁下には幅20㎝前後、床面からの深さ５～10㎝程度の小溝が巡り、張出部にも及ぶ。床面には大小のピットを検出した。特に西壁から2.2mの位置には、ピットがほぼ直列する。これらのピットは直



第５図　２号竪穴住居跡実測図（１/60）

径が30～50㎝のもので、深さは20㎝のものと70～90㎝の深いものがある。深いＰ２～Ｐ４は主柱穴と推定でき掘り直しが確認できる。周囲の浅いピットは補助的な柱を立てていた可能性がある。炉跡は未検出だが、床面の一部が赤変しており被熱を受けたものと推定できる。

床面は、１～２㎝の貼床が見られ、張り出し部と南西部には床面下に土壙状の掘り込みが見られた。これらは、地山である赤褐色土に黒褐色土が混ざったもので埋め戻されている。

当住居跡に伴う遺物は、弥生土器と銅矛中型がある。

３号竪穴住居跡（図版５-(3)、第６図）

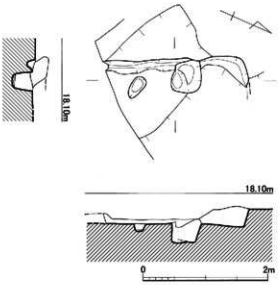
調査区東南部に位置し、１号住居に切られるためにコーナー部と壁溝、ピットを検出したのみである。住居跡の深さは残りの良いコーナー部で32㎝。

遺物は、弥生土器片が出土した。

(2) 溝状遺構（図版5-(4)、第7図）

調査区西側に位置する。北西から南東方向にのび、底面は南方へ徐々に下がる。幅1m前後、深さ20㎝前後で、断面形は逆台形を呈する。

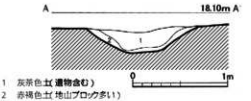
当遺構に伴う遺物としては陶磁器があり、他には混入品として弥生土器、土師器、須恵器、鞴送風管がある。



第6図　3号竪穴住居跡実測図（1/60）

(3) ピット

調査区が狭小なため正確な分布は不明だが、確認調査では調査区の西側外には、ピットは見られなかった。直径50㎝の大型のピットも確認できるが、掘立柱建物跡の柱穴になるものはなかった。



第7図　溝状遺構土層図（1/40）

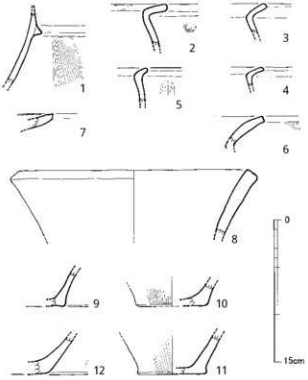
3．遺　物

(1) 土　器（図版6～8、第8～12図）

1号竪穴住居跡出土土器（1～12）

1は壺の体部で最大径下に断面三角形の突帯を貼り付ける。外面にハケ目を有す。

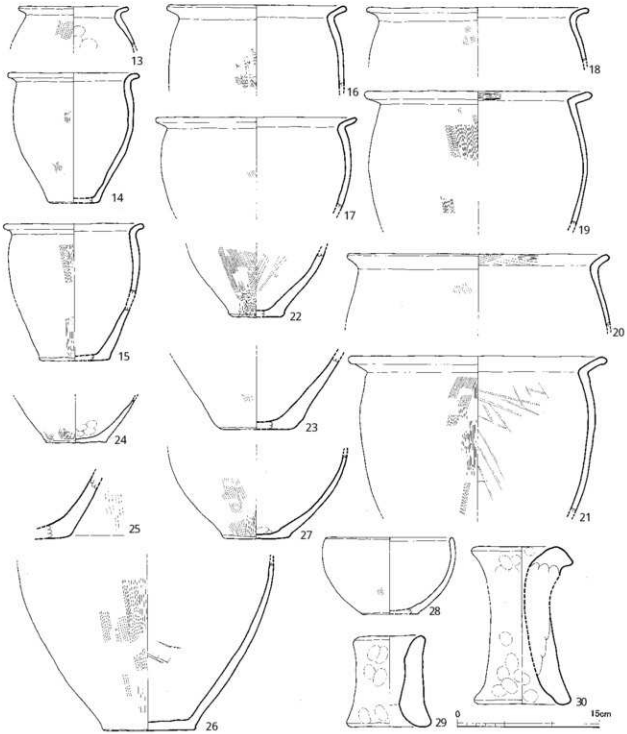
2～6は甕の口縁部片で、断面「く」字状を呈する。2は口縁部内面と胴部外面にハケ目、他はナデを施す。外面に煤が付着する。3は風化しているが調整はナデであろう。4・5は小型の甕。共に風化が目立つが、5の胴部には粗いハケ目が施される。5は小片のため傾きが異なる可能性があり、小形の無形壺の可能性もあろう。6は口縁部が長いもの。外面にハケ目が施される。



第8図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

7・8は土器の口縁部と考えられる資料。7は在来の土器には想定できない器形を呈し、色調も暗褐色で他の土器とは異なる。8は小片のためやや疑問が残るが、口径26.3㎝に復元できる資料。ナデを施すが、口唇部の調整がやや甘いため器台などの裾部の可能性も考えられる。胎土に雲母を含む。

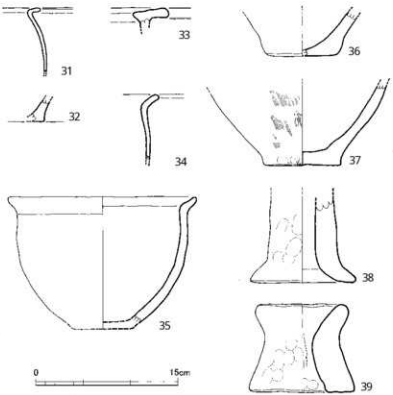
9～12底部片で、12がやや凸レンズ状を呈すが、他は平底。調整は、9は風化が著しく不明だが、他はハケ目を施す。



第9図　2号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）

2号竪穴住居跡出土土器（13～39）

13～21は甕の口縁部。13～15は小型の甕で、口縁部は頸部から緩やかに屈曲し、内傾しながら外に伸びる。口径は13が11.7cm、14が14.0cm、15が14.8cm、底径は14が5.4cm、15が7.6cmに復元できる。器高は14が13.8cm、15は13.2cm程度であろう。16～21は口縁部が「く」字状に屈曲する資料。復元口径は16が19.0cm、17が21.2cm、18が23.5cm、19が24.0cm、20が27.7cm。調整はナデやハケ目を基本とするが、21は胴部内面をヘラ状工具で調整する。22～27は底部。23・25のように底部と胴部の境が不明瞭なものがある。底径は22が6.0cm、23が8.2cm、24が6.4cm、26が9.8cm、27が7.0cm。27は胴部の内湾度から考えて鉢か壺であろう。

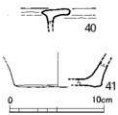


第10図　2号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）

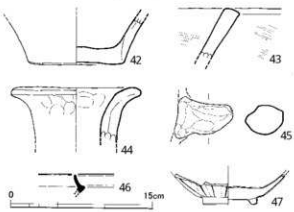
28は鉢で底部を1/4程度欠損する。口径13.2cm、底径6.0cm、器高8.1cm。風化が著しいが外面にハケ目が残存する。

29・30は器台。29は口径7.6cm、脚裾径9.0cm、器高9.7cmの小形の器台。「ハ」字に広がる脚裾部から筒部が直立気味に立ち上がり口縁部となる。30は口径10.8cm、脚裾径10.2cmの資料で、接合しないが出土状況と色調などから同一個体と考えて間違いない。脚裾部から筒部が内傾しながら立ち上がり、上位で外反する鼓状の形態が考えられる。

31・32はP1、33～35はP2、36～39はP4出土。31は小型の甕の上半部。内傾し、「く」字気味に屈曲する。32は底部細片。33は甕の口縁部片。内傾し、内端部は突出する。34は小型の甕の口縁部で、頸部から緩やかに外に屈曲する。風化が著しく調整は不明。35は鉢で、底部を欠く資料。復元口径は20.0cm、残器高は13.3cm。胴部は内湾気味に立ち、口縁部は外に小さく屈曲させる。36・37は底部。36は底部と胴部の境がやや不明瞭な資料。土器25と器形、色調などが類似しており同一個体の可能性がある。37は底径8.15cmの資料で、外面はハケ目を施す。38・39は器台。38は筒部下半から裾部の資料。脚裾径11.2cm、残器高9.2cm。赤褐色を呈し、胎土に砂粒、雲母を含む。39は残存度1/2程度の資料。口径8.2cm、脚裾径11.1cm、器高9.3cm。外面は二次的な被熱を受けて、色調は黄灰色を呈する。胎土は、砂粒をやや含み、雲母が目立つ。



第11図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第12図　溝状遺構出土土器実測図（1/4）

3号竪穴住居跡出土土器（40・41）

出土した遺物は少量で、図化したものは2点である。40は甕の口縁部片で、やや内傾し内端は突出する。41はやや上げ底気味の底部片。

溝状遺構出土土器（42～47）

42～44は弥生土器。42は甕の底部で、底径10.4cmに復元できる。風化が著しく調整は不明。43は後期の甕の口縁部片で、甕棺に転用されるような大形品。内外面にハケ目が残存する。44は器台で口縁部が外反しながら開くもの。

45は土師器の甕や甑などの把手。46は須恵器の杯身片。

47は龍泉窯系青磁碗Ⅱ－ｂ類の高台部で、高台径は5.8cm。体部外面に片彫り蓮弁文を有し、弁の中心に鎬が見られる。釉はオリーブ色でやや厚めにかかる。胎土は緻密で青灰色を呈し、硬質に焼きあがる。

(2)　青銅器鋳造関連遺物（図版9・10(1)、第13・14図）

1は1号竪穴住居跡から出土した石英長石斑岩製の鋳型で、2面に青銅器の彫り込みが確認できる。先端部と末端部の一部は欠損するが、直方体で残存長31.35cm、最大幅10.2cm、最大厚6.1cm、重さ3.15kgと残存状況はよい。風化のためか表面はザラつき、やや軟質の観があり、色調は茶白色を呈する。

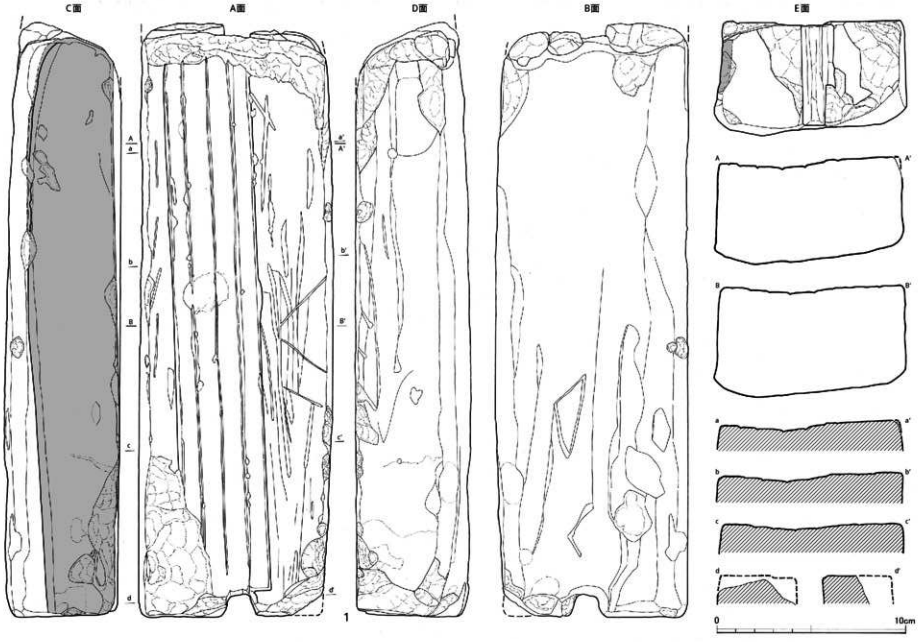
A面は銅剣鋳型で、石材に対して左上がりに剣の型が刻まれ、表面が僅かに変色するため、実際に使用されたことが分かる。剣身はほぼ直線的に彫り込まれ、鋳型下部に関部と茎部が確認できる。平面形や断面形を見ても明らかなように、剣身の中心を通る鎬の両側にも鎬が刻まれている。鋳出される銅剣は全長28.9cm以上、幅4.5cm、厚さ0.7cm程度と考えられる。なお、剣型の右側には工具痕が多数見られる。

C面は銅矛鋳型の鋒部左半で、樋は確認できない。型は黒変しており使用されたことは間違いない。型の幅は最も残りの良い部分で4.65cm残存する。

E面は鋳型の彫り込まれたA・C面に対し直角に近く、平滑な面をなし断面台形状の溝が彫り込まれている。この溝状の彫り込みは、春日市伝皇后峯出土鋳型や福岡市高宮八幡宮所蔵鋳型のように分割して製作した鋳型を継ぎ合わせて使用するものに確認できる。なお、左側縁にはC面銅矛鋳造時の黒変が幅5mm程度の帯状に見られる。

B・D面は、工具痕や直線的なラインは見られるが、青銅器の彫り込みは確認できなかった。

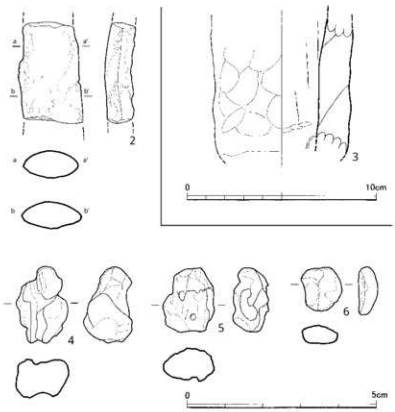
以上のことから当鋳型はC面（銅矛鋳型）が先に使用され、破損などにより銅矛鋳型として機能しなくなったために再加工してA面（銅剣鋳型）を製作したことが分かる。



第13図　青銅器鋳造関連遺物①（1/2）

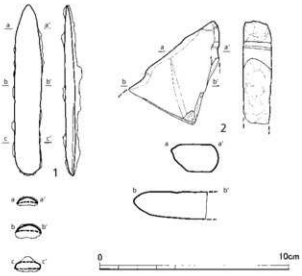
2は2号竪穴住居跡から出土した銅矛中型片。残存長2.65㎝、最大幅1.6㎝、厚さ0.7㎝、重さ3.5ｇである。色調は灰黒色～灰白色で、表面は硬化し付着物や気孔が著しく見られるため使用されたことが分かる。また、主軸方向に湾曲する側面形は、鋳造過程の失敗を示している。

3は溝状遺構から出土した鞴の送風管片で、胎土や焼成から弥生時代の混入品と考えられる。残存長7.2㎝、外径7.5㎝前後、内径3.6～4.8㎝に復元できる。外・内径や外面の残存部から送風管の末端部付近と推測した。外面は指押さえ、内面には絞り痕と縄目状の圧痕が残る。縄目状の圧痕は螺旋状になると推定でき、送風管の成形過程を表すものと考えられる。送風管を中空にするために芯となる棒に縄を直接、あるいは草などを咬ませて巻きつけ、それに粘土を巻き、成形・乾燥後に芯を抜いたのであろう。



第14図　青銅器鋳造関連遺物②（１/１・１/２）

4～6は1号竪穴住居跡のベット状遺構の直上から出土した銅滓。銅滓と土が付着した3㎝程度の塊をクリーニングした結果、多数の細片と図化した3片に分かれた。4は最大長2.05㎝、最大幅1.4㎝、最大厚1.3㎝、重さ3.1ｇ。5は最大長1.7㎝、最大幅1.35㎝、最大厚0.9㎝、重さ2.7ｇ。6は最大長1.15㎝、最大幅1.1㎝、最大厚0.5㎝、重さ2.1ｇ。風化のためか表面は粉っぽく、青白色を呈す。



第15図　鉄器・石器実測図（１/２）

(3)　鉄器（図版10(2)、第15図）

1は1号竪穴住居跡の床面直上から出土した鉋の完形品。全長9.0㎝、最大幅1.45㎝、最大厚0.5㎝、重さ15.6ｇを測る。断面形は鋒から中位まではお匙面状を呈し、基部は薄

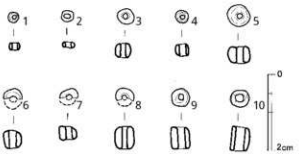
鉾状に近い。両端は凸面側にそり気味である。

(4) 石器（図版10 (2)、第15図）

2は砂岩製と考えられる砥石で、1号竪穴住居跡から出土した。最大長5.45㎝、最大幅4.8㎝、厚さ1.5㎝、重さ27.3ｇを測る。表面と裏面は砥石として利用されるが、2側面の1ヶ所ずつに丸みを持った加工が施される。この加工は、元々何らかの製品であった時のものなのか、砥石としての痕跡なのか不明である。

(5) ガラス小玉（図版10 (3)、第16図）

1～3はコバルトブルー、4～10はマリンブルーを呈する。1・2は外径3.0～3.5㎜、厚さ2.0㎜以下の小型品、8～10は外径5.0㎜程度、厚みが6.0㎜程度で管玉に近い大型品、その他はこれらの間に納まる中型品。9・10は断面形が長方形でシャープな印象を受ける資料で、両端と側面の主軸方向に研磨が見られる。研磨も関係するのか、風化のために表面の一部が淡黄灰色を呈する。



第16図　ガラス小玉実測図（1/1）

表1　ガラス小玉観察表

No.	外径	厚さ	孔径	色調	分類	No.	外径	厚さ	孔径	色調	分類
1	3.0㎜	2.0㎜	1.0㎜	コバルトブルー	小型品	6	5.0㎜	5.0㎜	1.5㎜	マリンブルー	中型品
2	3.5㎜	1.8㎜	1.8㎜	コバルトブルー	小型品	7	6.0㎜	5.0㎜	1.4㎜	マリンブルー	中型品
3	4.4㎜	4.0㎜	1.1㎜	コバルトブルー	中型品	8	5.0㎜	6.0㎜	1.0㎜	マリンブルー	大型品
4	3.7㎜	3.5㎜	1.5㎜	マリンブルー	中型品	9	4.8㎜	5.8㎜	1.8㎜	マリンブルー	大型品
5	6.0㎜	4.5㎜	1.3㎜	マリンブルー	中型品	10	5.0㎜	6.5㎜	2.3㎜	マリンブルー	大型品

Ⅳ まとめ

１．弥生時代の集落について

御陵遺跡は春日丘陵の西側に位置する台地上に広がる遺跡で、北流する川久保川の西（南）岸に立地する。平成２年に行われた１次調査では、古墳時代初頭を中心とする遺構が確認された[1]。しかしながら、各遺構からは、弥生時代中期から後期の土器や、青銅器鋳型、坩堝／取瓶が出土しており、周辺に弥生時代の集落・青銅器工房が存在することが推定された。

今回の２次調査では、弥生時代の住居跡３軒を確認した。３号住居跡は１号住居跡に切られるため残りは悪いが、中期の竪穴住居と考えて問題なかろう。

１号住居跡は調査区の際で検出されたことや、攪乱によって破壊されるため状況はよくなかったが、残りのよい青銅器鋳型や銅滓、鉄製鉋、ガラス小玉など重要遺物が出土した。出土した土器が少量のため時期の確定は難しいが概ね後期前半から中頃であろう。

２号住居跡は３軒の住居跡の中では最も残りがよいが、立地が斜面であるため南側と東側の残存状況はよくない。このため１号住居跡との切りあい関係については掴めなかった。北西側に張出を有し、主柱穴を補うように柱穴が列を成す形態は通常の住居跡とは異なる。出土遺物は、後期前半を主体とする土器が出土した。また、１点だが銅矛中型が出土したことは特筆される。

以上のように当調査では、弥生時代後期前半を中心とする住居跡を検出し、青銅器鋳造関連遺物が出土した。石英長石斑岩製の鋳型は、鋳型としての役割を終えた後に砥石に転用され、集落外まで待ちだされる可能性がある。これに対して銅矛などの中型、坩堝／取瓶、銅滓、鞴送風管は集落外まで持ち出され再利用されることはまずない。つまり、中型、坩堝／取瓶などが出土する遺跡は青銅器生産遺跡である可能性が極めて高い。

今回調査した１・２号住居後からは、石製鋳型だけでなく銅滓、銅矛中型が出土した。さらに、中世の溝状遺構からは、弥生土器と共に胎土などから弥生時代でほぼ間違いない鞴送風管も出土した。このような青銅器鋳造関連遺物や、１次調査の成果とも合わせて考えれば、御陵遺跡が青銅器生産遺跡であることは間違いない。

攪乱などによって１・２号住居跡の全体像を把握できなかったことは残念であるが、特殊な平面形や複数の青銅器鋳造関連遺物が出土したことから、住居跡が青銅器工房の可能性は十分にあろう。

なお、１号住居跡からは10点のガラス小玉が出土している。青銅器生産とガラス玉生産が関連することは、須玖岡本遺跡坂本地区や須玖五反田遺跡の調査からも明らかであり、１号住居跡では青銅器生産だけでなく、ガラス小玉も生産されていた可能性があるのではなかろうか[2]。

２．青銅器鋳型について

御陵遺跡の石製鋳型は、本来、組合せ式の銅矛鋳型だったものを銅剣鋳型に転用したものである。以下では、銅矛鋳型、銅剣鋳型の順に述べたい。

(1) 銅矛鋳型（図版９、第13図）

銅矛鋳型は、銅矛の鋒下から刃部の中ほどまでが彫り込まれ、銅矛型の鐏部分、もしくは鐏から若干左に平行したラインに沿って切断された資料である。このことから鋳型から鋳出される銅矛の刃部の最大幅は9.3㎝以上と考えられる。吉田広氏の研究[3]を参照すると、銅矛の刃部の最大幅が９㎝以上になるのは広形Ⅰ式銅矛からである。しかも、当資料の鋒部のカーブと製品である銅矛の鋒を比較すると広形Ⅰ式銅矛でも中広形銅矛に近いものの平面形に似る。

現時点までに出土した銅矛鋳型のうち、当鋳型のような２個体以上の鋳型を連結するための溝状の彫り込みを有す鋳型（以下、連結溝を有す鋳型とする）は、広形銅矛の鋳型に限られる。もっとも、残存状態のよい中広形銅矛鋳型は出土数が少なく、今後、連結溝を有す中広形銅矛鋳型が出土する可能性もあるが、現在の資料からは、連結溝の彫り込みは広形銅矛鋳型からと考えたほうがよかろう。

以上のように、銅矛の刃部最大幅、鋒のカーブ、連結式の鋳型ということを考えれば、当鋳型は、広形Ⅰ式でも古式の銅矛の鋳型といえよう。なお、初鋳に近い段階で銅矛鋳型の樋部が剥落したために樋部の残存部を砥ぎ落とし平滑にした可能性も否定できないが、推定される鋒から24㎝前後まで樋部が見られないことからも、広形銅矛と考える方が矛盾がない。

当銅矛鋳型は、弥生時代後期前半から中頃と考えられる１号住居跡から出土した。また、同じく２号住居跡からは銅矛中型が出土している。この中型は断面の形状が凸レンズ状を呈しており広形銅矛の中型と考えて間違いない[4]。この２例から考えて、後期前半頃には広形Ⅰ式銅矛は製作されていたと考えられる。なお、広形Ⅰ式とⅡ式が共伴した長崎県搭の首遺跡３号石棺墓は、共伴した土器から後期中頃の時期とされる[5]。搭の首３号石棺墓は、広形Ⅱ式銅矛の上限を示すものと考えられるため、広形Ⅰ式銅矛は後期前半から中頃を中心に製作されたのであろう。

(2) 銅剣鋳型と復元される銅剣（図版９、第13・17図）

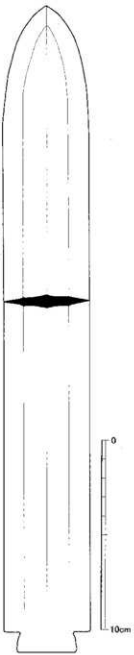
銅剣鋳型は、銅矛鋳型を縦に切断した面に彫り込まれ、鋒部と関部左から茎を欠損するが、当鋳型から鋳出される銅剣の復元はおおよそ可能である。

復元される銅剣は、身幅が約4.6㎝で、関から鋒までほぼ直線的に延びる直線刃の形態を呈する。鋳型を観察すると欠損する先端部では、身幅がやや狭くなることから鋒部に近いと考えられる。これ

は、銅矛鋳型の復元長から考えても妥当で、剣身が33㎝前後の銅剣が鋳出されたと思われる。

なお、復元される剣身に比べ身幅が広い感があるため、剣身はもっと長いのではないか？という意見もあろう。確かに広形銅矛のように複数の鋳型を連結させれば剣身を長くすることは可能である。しかしながら、もし複数の鋳型をつなぎ合わせるならば、銅剣鋳型は鋳型石材の主軸に沿って彫り込まれるはずで、当鋳型のように鋳型石材の主軸に斜行してして彫り込みはしない。

また、当鋳型の鋒部はかなり石材の左側面によるため、鋳型を連結し長大な銅剣を鋳造することは困難と推測され、鋳型を複数つなげたとは考えられない。やはり、この銅剣は剣身33㎝前後で、単体の鋳型を合わせて鋳造されたと考えるほうが自然である。



第17図　銅剣復元図（１/２）

茎部については、鋳型では若干確認できるのみである。復元すると幅3.1㎝、長さ1.1㎝程度であろう。

ただし、当銅剣鋳型で茎を製作する上でひとつ大きな問題がある。銅剣鋳型茎部の中央右寄りには銅矛鋳型の連結溝が刻まれることである。このままでは注湯できないので、真土で補修するか、ここを湯口として（掛堰などをつけて）、鋳造を可能にしたと考えられる。

なお、製品の茎については鋳造後に加工された可能性が考えられるため、ここで触れておきたい。銅剣鋳型を観察すると鎬は茎まで至らず茎の８㎜程手前で止まっている。このため銅剣の鎬を鋳出さない部分は柄の中に納まる可能性が考えられる。須玖岡本王墓から出土した多樋式銅剣は、鋳造後に茎が削り出されている[6]。以上のことから考えても、当鋳型から復元される銅剣が鋳造後に茎を加工し長くした可能性は十分にある[7]。

横断面形は、復元すると扁平な菱形に近い八角形と考えられ、円柱状の脊はない。鋳型の平面形を見ても明らかなように、剣身は主軸に沿ってほぼ均等に４分割され、刻まれた分割線が鎬となる。鋳型剣身部の横断面形を観察すると、中心の鎬とその両側に平行する鎬の間はわずかに凸面をなす。このため製品では匙面状の樋になり、両側の鎬から外側は磨がれ刃部を形成すると考えられる。剣身の厚みは７㎜程度であろう。

以上、鋳出された銅剣（茎の加工前）について述べてきたが、まとめると、剣身長33㎝前後、身幅4.6㎝、最大厚７㎜、茎長1.1㎝前後、茎幅3.1㎝程度で、横断面形が菱形に近い八角形を呈した銅剣が復元される（以下復元銅剣）。

このような直線刃型式で円柱状の脊を持たない銅剣は、弥生時代の北部九州に通有の銅剣である細形銅剣、中細形銅剣や、中広形銅剣、

平形銅剣などとは大きく形状を異にする。また、直線刃型式の銅剣でも深樋式銅剣とは脊や樋の形状が異なる。

直線刃型式で円柱状の脊がなく、しかも樋が匙面状を呈する銅剣としては、戦国式系銅剣、多樋式銅剣が挙げられる。復元銅剣と戦国式系銅剣を比較すると戦国式系銅剣の両従（樋）が幅広なのに対し、復元銅剣の樋が身幅の約１／４と狭い点が異なる。一方、多樋式銅剣と比較すると、復元銅剣は樋の数が２本足りないが、剣身の主軸方向に均等に鎬を作り出す点は共通する。また、先に述べたように復元銅剣の茎、関が鋳造後に削り出されるとすると、これは多樋式銅剣とも共通する手法である。

現時点では、製品が出土していないため、銅剣の復元については推測の域を出ないが、銅剣の系譜について考えると戦国式銅剣、或いは多樋式銅剣にたどれると考えたい。復元銅剣が剣身長に比して身幅が広いことから考えても、戦国式系銅剣、多樋式銅剣に後出する型式と考えてよかろう[8]。

註

(1) 春日市教育委員会　2004『御陵遺跡』春日市文化財調査報告書　第36集

(2) 春日市須玖岡本遺跡坂本地区、須玖五反田遺跡、平若Ｃ遺跡、須玖坂本Ｂ遺跡などでは、ガラス製品の鋳造関連遺物が出土しているが、これらの遺跡は青銅器生産遺跡でもある。また、福岡県筑前町ヒルハタ遺跡では一つの鋳型に仿製鏡、十字型銅製品、銅鏃の型と共にガラス勾玉の鋳型が確認できる。これらのことから青銅器生産とガラス玉生産が密接に関係していたことがわかる。ただし、今回のガラス小玉は鋳造品ではないため青銅器生産との関連性については可能性までに止めたい。

(3) 吉田広編　2001『弥生時代の武器形青銅器』考古学資料集21

(4) 須玖遺跡群では、現在、500前後の銅矛中型が出土しており、断面形が円形に近いものから凸レンズ形のものまである。例えば、弥生時代中期中頃の須玖タカウタ遺跡の中型は断面形が円形に近く、終末期前後の須玖永田Ａ遺跡の中型は凸レンズ形である。この中型の断面形が、製品である銅矛袋部の断面形と共通することはほぼ間違いない。以上のことから、今回報告する中型は広形銅矛の中型と考えた。

(5) 柳田康雄　2003「短身銅矛論」『橿原考古学研究所論集』第十四　八木書店

(6) 森貞次郎　1968「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化―金関丈夫博士古希記念論集―』

岩永省三　1986「２．銅剣」『弥生文化の研究』６道具と技術Ⅱ

境　靖紀　2004「多樋銅剣の系譜と意味」『福岡大学考古学論集―小田富士雄先生退職記念―』

また、平壌貞柏里採土場出土の多樋式銅剣も茎は削りだされているようである。

藤田亮策・梅原末治　1947『朝鮮古文化綜鑑』

(7) 小田富士雄氏から御教示いただいた。

(8) 御陵遺跡出土鋳型の復元銅剣の系譜については、紙片も限られており別項で改めたいが、春日市立石遺跡出土銅剣の位置づけも重要となろう。

図　　版

御陵遺跡周辺航空写真

図版2

(1)　御陵遺跡２次調査区全景（西から）

(2)　調査区拡張部

(1) 1号竪穴住居跡拡張前（東から）

(2) 1号竪穴住居跡A－A′土層

(3) 1号竪穴住居跡炉跡半裁状態

(1)　1号竪穴住居跡鋳型出土状態

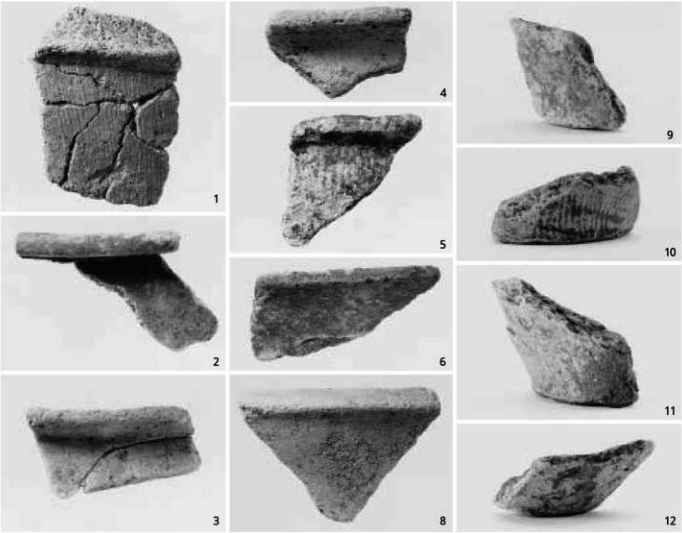
(2)　1号竪穴住居跡鉈出土状態

(1)　2号竪穴住居跡全景（東から）

(2)　銅矛中型出土状態

(3)　3号竪穴住居跡全景（北東から）

(4)　溝状遺構土層（南東から）



(1)　1号住居跡出土土器

(2)　2号住居跡出土土器①

18

19

20

21

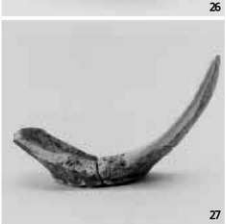
22

23

24

25

26


27

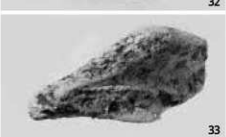
28

29

30

31

32


33

2 号住居跡出土土器②

34

36

38

35

37

39

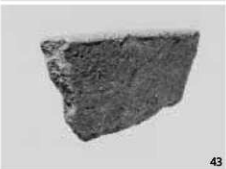
(1)　2号住居跡出土土器③

40

41

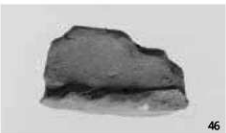
(2)　3号住居跡出土土器

42


43

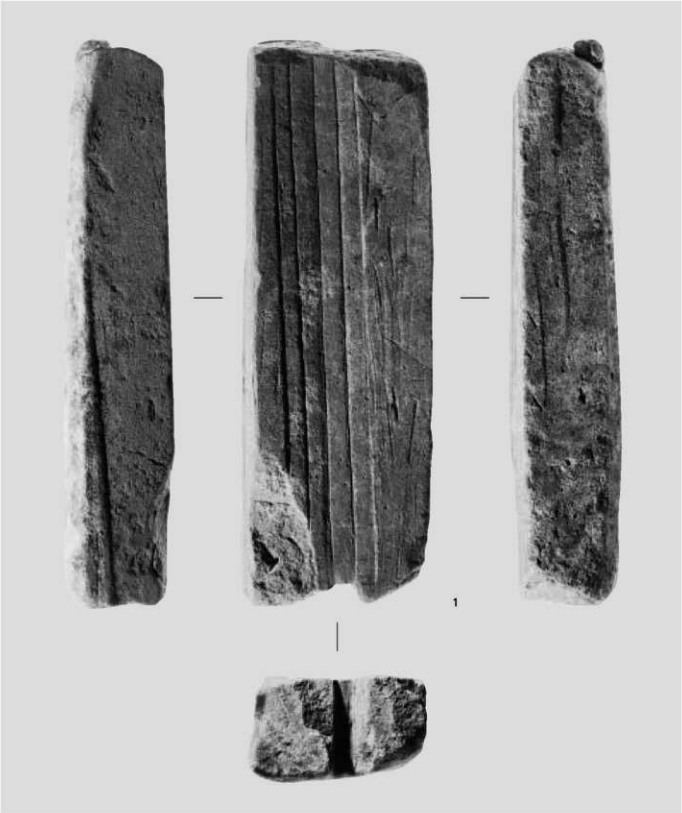
44

45

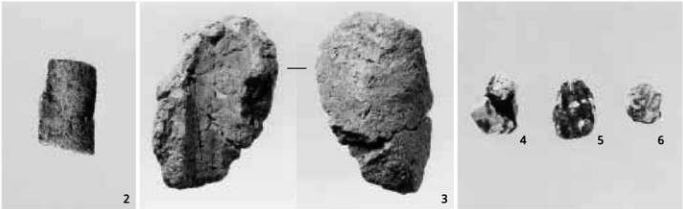

46

47

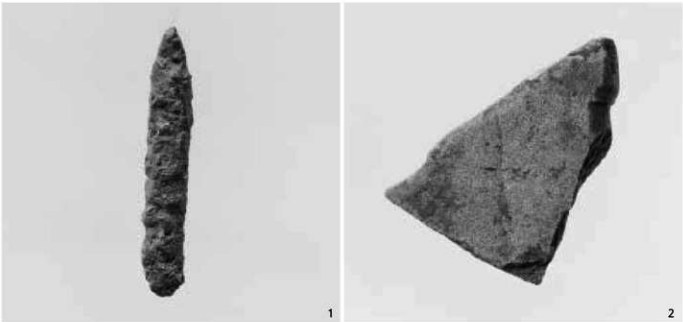
(3)　溝状遺構出土土器



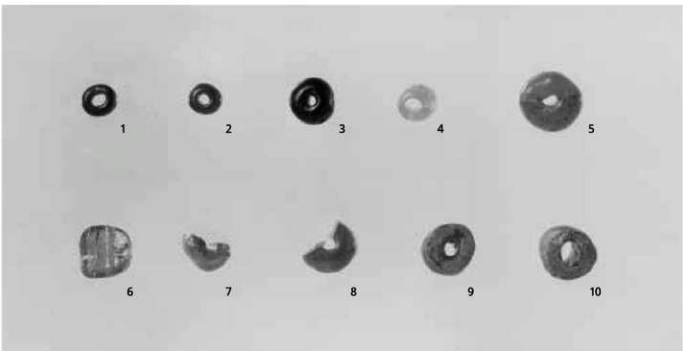
青銅器鋳型



(1) 銅矛中型・鞴送風管・銅滓



(2) 鉄鏃・砥石



(3) ガラス小玉

報告書抄録

ふりがな	ごりょういせき
書名	御陵遺跡－２次調査－
副書名	福岡県春日市須玖北所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	春日市文化財調査報告書
シリーズ番号	第56集
編著者名	井上　義也
編集機関	春日市教育委員会
所在地	〒816 0804　福岡県春日市原町３丁目１番地５　TEL 092 584 1111
発行年月日	西暦2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ごりょういせき 御陵遺跡 ２次調査	ふくおかけんかすがし 福岡県春日市 すくきた 須玖北９丁目 ばん 75番地	40218		33° 32′ 37″	130° 26′ 35″	2008.7.14	64.6	個人専用住宅建設に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御陵遺跡 ２次調査	集落	弥生 中世	竪穴住居跡　３軒 溝状遺構　１条	弥生土器 青銅器鋳型　１点 銅矛中型　１点 銅　滓　３点 羽送風管　１点 ガラス小玉　10点 鉄　器　１点	青銅器鋳型及び銅矛中型、銅滓など青銅器鋳造関連遺物を出土した遺跡。

要約

弥生時代の遺跡として著名な須玖遺跡群が分布する春日丘陵の西側の台地に立地する遺跡で、春日市と福岡市境にある。当遺跡を含めた周辺の遺跡では大規模な発掘調査が行われていないが、高い比率で弥生時代の青銅器鋳型などの青銅器鋳造関連遺物が出土しており、弥生時代の青銅器生産を復元する上で注目すべき地域である。

今回の調査でも、青銅器鋳型をはじめとする青銅器鋳造関連遺物が複数出土しており、当遺跡が青銅器生産遺跡であることは、ほぼ間違いない。さらに、住居跡の中には特殊な形態をするものがあり、青銅器工房跡の可能性も考えられる。

また、青銅器鋳型は銅矛と銅剣の型が確認できた。銅矛鋳型は、広形銅矛の鋳型と考えられる。銅剣鋳型は、特殊な銅剣を鋳出すもので、その系譜や未発見の製品の出土が期待される。

御陵遺跡 2

春日市文化財調査報告書
第56集

平成22年 3 月31日

発　行　春日市教育委員会
福岡県春日市原町 3 丁目 1 番地 5

印　刷　株式会社 昭和堂 九州支店
福岡県福岡市博多区東比恵 4- 2- 10